

人生100年時代を支える

住まい環境整備モデル事業

令和6年度 事業者交流会

開催日時	令和7年3月24日(月)13:00~14:40	
開催方法	ZOOMによるオンライン開催	
プログラム	(敬称略)	
	1. 開会の挨拶 高橋 紘士 (住まい環境整備モデル事業 評価委員会 委員長)	
	2. シンポジウム	
	(1)選定事業者からの実施報告	
	① 困難を抱える女性が安心して暮らせる六甲ウィメンズハウス事業 公益財団法人神戸学生青年センター (令和4年度・課題設定型)	
	② 地域総合交流拠点「ソーネおおぞね」を活用して住宅団地再生を軸とした地域社会再創造事業 社会福祉法人共生福祉会 (令和3年度・課題設定型)	
	(2)クロストーク コーディネーター 三浦 研(評価委員会 委員)	
	3. 閉会	
参加者	選定事業者	27事業者 (住まい環境整備モデル事業選定事業者)
	評価委員 (敬称略)	高橋 紘士 (評価委員長・東京通信大学 名誉教授)
		三浦 研 (評価委員・京都大学大学院 工学研究科 建築学専攻 教授)
山田 あすか (評価委員・東京電機大学 未来科学部 建築学科 教授)		
主催	国土交通省住宅局安心居住推進課/住まい環境整備モデル事業評価事務局	

クロストーク 三浦委員にコーディネートしていただき意見交換等を行いました。

○報告者から住宅と福祉が一体となった居住支援の未来像について、お話をいただきました。ここからは個々の意見交換等、クロストークに入っていきたいと思います。 [三浦委員]

○【六甲ウィメンズハウス】は、「ここに住みたいと思える住まいづくり」を目指している。バリアフリーやユニバーサルデザインというハードの工夫を補完する形で、人同士の関係によるソフト部分の取り組みが「インクルーシブ」という解決策を見出している事業だと思いました。

○事業収支面ではいかがでしょうか。 [三浦委員]

○本提案は、ウィメンズネット・こうべ代表の正井氏が2010年にデンマークで視察し、共感したハウスのコンセプトを実現するために、様々な団体から支援を受け活動してきた結果と認識しています。当該社員宿舎の利用については、コープこうべからの提案であり、正井氏の地道な努力により、様々な団体や企業からの支援を受けられたものと思っています。

○事業の運営について、神戸学生青年センターとウィメンズネット・こうべ、2つの団体による運営協議会を立ち上げ、基本資金として500万円ずつ出資しています。相談員などスタッフの人件費は他の助成金を活用しながら運営しているため、現状では事業収支はマイナスにはなっていません。しかし助成金の利用には制限があるため、入居者を増やして、運営協議会を円滑に運営していきたいと思っています。 [朴氏]

○一般に女性というだけで様々な困難を抱える方々を支援するメニューが少ないと実感しているが、本提案では先ずはそうしたことに取り組んでいることに感銘を受けました。このように困っている方々への支援提案となる概念を「コモンズ」として言葉で表すことによって、改めて、これは自分だけの問題ではなく社会的問題であるということ共有できることは非常に重要ではないかと思いました。シェアと支援による公助共助モデルであるという話がありましたが、本提案は「シスターフッドコミュニティ」を再認識させる効果があると感じました。

○また企業のCSRの役割もうまく取り組んだ提案は、今後のモデル事業を考える上でのヒントになると考えるのですが、そのあたりについてはいかがでしょうか。 [山田委員]

○企業コラボレーションについては、今回は成功体験の部分のみを報告していますが、実際はそこに至らない事例も多々あり、厳しい状況でした。イケアは神戸市が地域連携の一環として推薦してくれました。またクラウドファンディングを通じて、全国からの支援を受けることができたのは、これまでつながりのあった記者の方々々に新聞・テレビ等で取り上げてもらったお陰なのです。いきなり単発で寄付を頂くのではなく、私たちの取り組みについてご理解いただき、時間をかけて少しずつお互いの信頼関係を築くことが大切なことと感じています。 [ウィメンズネット・こうべ]

○長きにわたる活動が実を結んだという貴重なお話をありがとうございました。地域連携についても、本モデル事業に選定されたことが後押しになることに繋がれば、嬉しいと思いました。 [山田委員]

○先日現場を見学させていただきました。寄付された方々の一覧などが壁に掲げられていて、関心ある方々、地域の方々が共同で力を寄せ合ってこの場が作られたとういのがよくわかりました。また、単一の事業体によるのではなく、複数の団体が共同で運営され、また、灘神戸生協が独身寮の建物を提供していることに見られる様々な支援者の広がり、神戸という地域性も関係していると感じました。一言付け加えれば、スウェーデンの家具メーカーが社会貢献として家具などを提供してくれているのも、雰囲気明るくしていますね。 [高橋委員長]

○【ソーネおおぞね】は、障害者事業を1970年代から開始しており、現在は愛知県の公社住宅のストックを活用して高齢者住宅等の整備・運営も行っている。まさに共生社会にあるべき取り組みを示していただきました。

○質問ですが、共生住宅の部分をセーフティネット住宅に登録されない理由について教えてください。 [三浦委員]

○公社住宅は公社住宅法に基づき、公社が自ら運営する場合ならばセーフティネット住宅登録ができますが、今回のようにサブリースの場合はできません。国土交通省にも確認しましたが同様の見解でした。 [西尾氏]

○公営住宅や寮等、転用可能な空き床を活用し、居住支援を展開することは重要と思いますので、今後の制度上の課題のひとつとも言えますね。

○現地を視察しましたが、住棟内の食堂が、障害者の就労の場になっていますね。その食堂が、居住者だけでなく地域の方も利用できるカフェのような場所になっているのが興味深かったです。これらの運営の効果をどのように感じていますか。 [三浦委員]

○朝食は時間的に難しいが、夕食時には一般の方も多く利用して、声掛けなどの交流が障害者の方にも自然に行われ、障害者スタッフも利用者の方に受け入れられるようになっています。食堂内には、子供たちを支援する目的の「みらいチケット(300円)」を置いていますが、それに寄付して下さる方々などの拡がりが出てきています。このような関係が生まれることは良いことだと思っています。 [西尾氏]

○本提案は既存ストックを活用するため、食堂を一か所に集約してレストランとして計画しました。その結果、色々な交流がうまれるきっかけとなった。ストック活用の好事例と言えます。 [三浦委員]

○障害者支援のため、住宅だけでなく就労の場が必要なこと、その就労の場が障害者にとって自信に繋がること、受け止める周りの人々にとって馴染みのあるものになること。こうした関係性に本提案のモデル性を感じています。さらに、地域の方々が支援員として働く場にもなっており、地域ぐるみで関係をつくる仕組みに感銘を受けました。どのようにしたら、このように上手く周りをうまく巻き込み、プログラム化できるのでしょうか。 [山田委員]

○私自身は、初期のサ高住「ゆいまーるおおぞね」の開発にも関わっており、この団地の自治会とは7年の付き合いがあります。取り組みの初期は、高齢化する団地に何故、高齢者住宅をつくり呼び入れるのかというクレームもありましたが、協議を重ねながらご理解を得ました。次第に、私も自治会にオブザーバー参加し、団地祭り等のイベントの調整役等を担うようになりました。さらに支援員の募集等、長い時間をかけて地域と信頼関係を築いていき、それが団地だけでなく、周辺地域に波及していきました。 [西尾氏]

○ソーネおおぞねは、障害者との共同生活の場であり、さらに子どもたちも喜ぶ楽しい場所という印象で、団地住民だけでなく、地域の方々の拠点でもあり、公社住宅等の集合住宅のリノベーションの先駆的モデルとして、これからの政策展開にむけ参考になる好事例だと思います。 [高橋委員長]

○今は、既存ストックの活用が求められる時代です。居住支援と連携しながら、福祉を分野ごとに分けるのではなく、子ども・学生・障害のある人・高齢者などが「ごちゃまぜ」に関わり合い、地域のハブとなる共生の場をつくっていく事例は、その可能性をとともわかりやすく伝えてくれます。複合的な課題を複合的に解いていくことが、これからの時代の豊かさにつながっていく——そんな局面に私たちがいることを、改めて実感できるクロストークだったと思います。 [三浦委員]